

自著と
その周辺

10代からの「いのち学」—あるがん研究者のつぶやき—

著者 谷口俊一郎

オフィスエム 2012年9月刊行

定価1,300円 (+消費税)

2011年東日本大震災の春、独立専攻主催の市民公開講座後に、「がん研究を中心に若者向けの本執筆を」と出版社から依頼があった。震災のことを意識し、自分の専門からの生命観や科学技術論に言及したからだろうか。単なる科学入門書ではなく、震災による原発事故の苦しみやいじめによる自殺など理不尽な死の問題が山積している現代において、生命科学者として若者に対する何かメッセージらしきことを書いて欲しいというのである。

重い内容の依頼に、正直、自分なんぞ対応するにはおこがましいことと躊躇したが、がん研究職の選択もその類の問題を強く意識した故であったし自分の考えを纏める機会として、また僅かでも若者の参考になれば幸いと考えた。

精神面も含む人間の生命を考えるので、ひらがなの「いのち」とした。依頼は「10代のいのち学」だったが、「10代からのいのち学」として、一般の方にも対応する形とした。メッセージといっても個人的葛藤結果の独り言であり、副題を「—あるがん研究者のつぶやき—」とさせて頂いた。

期せずして、同年9月から哲学、倫理や物理学の専門家有志と共通教育の科学論を開講予定だったので、科学史や科学観も含め、自分の専門である「がん」の解説や「いのち」観について、身近な者にボソボソ語るイメージで書き始めた。

始めに、大学紛争真っ盛りの荒んだ大学初年時に言及した。「物理学は原爆を生み出した悪」と活動家から激しく難詰され、自分が目指す学問の意義を余儀なく考えて大きな虚無感を伴う袋小路に迷い込んだこと、生きている実感を得たく生命科学へ進路変更したこと、後で振り返ると未熟で短絡した若気の至りと反省したこと等に触れた。

がんについて述べる前に、まずは近代科学の始まりである科学革命、宇宙の始め、地球の始め、生命の始め、そしてヒトの始めについて近代科学的概説を試みた。

そして以下のようなことを主として記した。1) 自分自身にとって科学を理解するために形而上学的疑問 Why? と形而下的疑問 How? という問い方の明確な区別が必要で、それが歴史的には科学革命における認識の変革に対応すると気付いた。2) 医学は人間をヒト生物として捉え、その構成物質「もの」と相互作用「こと」を問う。3) ありのままの「もの」と「こと」を記載する物理などの科学は、存在意義や目的に触れず無味乾燥で冷たく感じるが、その成果は Why? という自分の存在目的や意義に対する疑問にヒントを与えてくれる。4) 宇宙、地球、生命の発生そして考える自分が存在する確率は無に等しく有り難い。まさに奇蹟的であり、文字通り有難く与えられた「いのち」と感じる。5) 一般に科学は技術的有用性のみが評価・議論されがちであるが、生きる意味にヒントをくれる見え難い有用性こそが重要と考える。6) 本来の科学の在り様を見失わなければ、科学の進展に伴う不幸な諸問題に対峙する視点が定まる。

科学一般論は兎も角、さらに私の専門とするがんについて今日的理解と、人間の死など、諸問題についてがん研究を通して考えたことを、述べた。1) がん細胞の発生には複数の遺伝子構造の変化あるいはエピジェネティックな変化の蓄積が必要である。2) 遺伝子には死のための情報も書き込まれており、個体の構成細胞は必要時に計画死するので一身体として生存できること、その意味でがんは細胞が死ねない病気である。3) 地球規模でいえば、一身体を超えて生命の流れとしての存続がある。4) がん細胞の形質は不安定であり不均一・多様な細胞集団となる。結果として薬剤耐性や転移が生じ、それ故にがんは難病である。5) 不均一な集団を攻撃するには、個々の分析的追求に加え、その集団の場特異性を標的として模索すべきである。6) がん細胞の不均一性・多様性は厄介であるが、ヒト生物集団が遅しくあるためには不均一性・多様性が重要である。7) がん以外にも、遺伝子の病気は存在するが、遺伝子構造・機能の変化で生命の進化が生じたし、ヒト生物の存続には必要と考えられる。8) ヒト生物社会は弱さを含め多様性を大切にすべきである。遺伝病の個々の苦しみは社会が共にケアし担うべきことであり、同時に医学は当然ながら患者さんの QOL 向上のため技術開発を目指さねばならない。

自然科学とがん研究の諸問題に触れつつ、以上のような内容を徒然述べた。医学生には科学やがん研究の概要に触れて頂くと同時に科学の目に見えない有用性を感じて欲しい、と願っている。冷やかし半分結構で読後感、議論と異論を私に投げかけて頂ければ幸いである。

(信州大学大学院医学系研究科疾患予防医科学系専攻分子腫瘍学講座 谷口俊一郎)

